

療にも使われる。普通の風邪とか頭痛腹痛は、昔の貨幣とかスプーンとかで、ゴリゴリと身体をこすって皮下出血させると治ってしまう。わたくしも一度してもらったが、欠けた茶碗に薬が入っていて、それをちょっと塗ってはゴシゴシとこする。この薬がなんだかなじみのある匂いなので名前をたずねると、石油という返事であった。これで治らない時に先生（ローク・クルー [lo:k kru:]）を呼ぶ。たいていは呪文を唱えて、プッと息を吹きかけた水を飲むことになるのだそうだが、重病の時には秘伝の薬を調合する。わたくしのインフォーマントの1人もこれを心得ていたが、その最も得意とするのは、古文書を焼いた灰とのことだった。五、六人もの人にかかっても治らなかった精神病の娘もこれで良くなったそうである。

麻疹にかかった子供に人糞をよく乾かしたものを飲ませるのは、かれに限らず広く行なわれているとのことであるが、抗体が糞に出るものなら医学的に根拠があるかもしれない。

呪術でもう一つ有名なのは、スナエ[snae]である。これは、依頼して作ってもらったところの、呪文のこもった薬を目指す相手の身体に塗っておけば、その人の魅力のとりことになってしまうという媚術である。第二王妃が正妻の地位を奪わんとして、これを用い、首尾よく第一王妃を追い出すことに成功するが、ついにスナエを用いたことが露見して、象に踏み殺させるという死刑に処せられるという映画もあったが、伝説等にもよく出てくる。現在でも、ダンスホールのダンサーが、客がつかないと収入にならないので、金持の客にスナエをかけて、毎夜自分の所に通わせるが、せっかくこうして得た収入も大半がスナエ代として消えてしまうとのことである。

留学期間の残り2カ月のあいだに、誰かわたくしにスナエをかけてくれないかと期待しているしだいである。

## 国際稲作研究所より

法 貴 誠

### I

今年の1月26日にフィリピンの国際稲作研究所(The International Rice Research Institute 略して IRRI)に research fellow として来て以来5カ月近くになる。こちらの研究所には今までにも日本から多くの方々が訪問されており、またここで研究に従事された方も多い。IRRI のことについては以前に research fellow としてこちらで研究生活を送られた京大農学部の高村泰雄氏の報告(『東南アジア研究』3巻1号, p. 144)にも詳しい。わたくしは今のところ研究所の中にいることが多いので、こちらの事情については一部のことを理解したにすぎないが、今までに見たり聞いたりし、感じたことなどを思いつくままに書いてみようと思う。

### II

研究所はマニラの東南約70kmのところであり、車で約1時間半の道程である。ハイウェイと呼ばれている国道を走るのであるが、日本のハイウェイとは大違いである。道路幅は日本の一級国道ぐらいいはあるが、ところどころ舗装がやぶれ穴があいている。しかし、ここを走る車は多く、しかもみなひじょうに

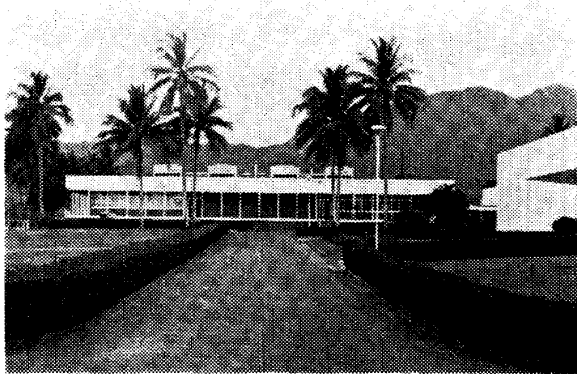


写真1 IRRの Laboratory 外観

スピードを出している。とくに、アメリカ製の大型トラックを改造した強力なエンジンを持つ長距離バスは乗客を満載し、時速90kmくらいでとばす。制限時速は50kmであるが全然気にしていない。しかも、対向車が少し途切れたわずかの間をぬってどんどん追い越しをやる。乗っていても危なっかしくて見てられない。時々事故が起きる。バスに当てられた方は即死であり、バスの乗客も20人くらいは死ぬことがある。新聞にはでかでかと写真がでるが、交通事故の防止はこちらでもなかなか難しいようである。

このハイウェイを走ること64km、ここで十字路を右に折れるといよいよIRRも近い。このあたりロスバニョス (Los Banos) という小さな田舎町の一角で、道の両側には住宅、小さな食堂、雑貨店などが並んでいる。また洋服の仕立て屋、散髪屋、映画館、ボーリング場も見られる。これらを左右に見ながら2kmも行くとゲートがあり鉄砲を持った守衛が立っている。これよりフィリピン大学農学部 (University of the Philippines, College of Agriculture 略してUPCA) の構内でありこの中にIRRの建物がある。あちこちに点在するUPCAの各研究室の建物を見ながら、バナナやココナツの森の中をぬって行くと視界が開け田んぼが目に入ってくる。これらは大学の農場であり、この中をコンクリート舗装された一直線の道が走っている。道の両側に



写真2 図書館

はピリという木が植わっており、この道路をピリドライブと呼んでいる。ここからIRRへの専用道路である。はるかかなたの田んぼの中にモダンなIRRの建物がぼつんと建っている。しかし近づいてみるとなかなか大きく、白い建物を一見した感じでは日本の化学メーカーの研究所といったところであろうか。稲作研究所という言葉から描くイメージとは全く異なっている。ここでまたIRRの守衛の敬礼を受け中に入ることになる。大事なお客とみれば、守衛が玄関の噴水のスイッチを入れ高々と水を噴き上げ歓迎する。

さてこの研究所はAdministration Building, Laboratory, CafeteriaとDormitory, それにService Buildingから成っている。Administration Buildingの中には図書館、大講義室、郵便部、会計部、庶務部、広報部、写真部、出版部などがある。ここからマニラホテル内のIRRの事務所へは毎日1回専用の郵便車が往復している。またこの事務所とIRRの間には無線電話が通じているのでいつでも連絡がとれる。これらの施設は一見あまりにもぜいたくすぎるという感じがするのであるが、これは逆にいえば、この土地がこのような施設を作らなければ研究活動ができないほど不便な状態にあるということにもなる。事実、例えばここからわずか70kmのマニラへの市外電話がうまく通じないような状態なのである。200名を収容する大講義室

では毎週木曜と土曜にセミナーが開かれ、チャンドラー所長、マックラン副所長以下各部門のスタッフ、助手、研究生が出席する。木曜セミナーは程度が高く、テーマは稲作に関する専門的なことから「IRRIの将来」あるいは「国際的協力のあり方について」などと変化に富んでいる。土曜セミナーの方はIRRIとUPCAの大学院学生を対象にした講義といった傾向が強い。この大講義室には映写設備を完備しており、毎週水曜日夕方には映画会が行なわれている。スタッフの家族もよく顔を見せる。

Laboratoryには、植物生理学、化学、品種改良学、植物病理学、昆虫学、農学、土壌化学、農業経済学の各部門の研究室および実験室があり、スタッフ以下助手、研究生が研究を行なっている。Cafeteriaはセルフサービスであるが、京大の食堂のように食器をもとに戻す必要はない。ここで使っている米の品種は日によって変わるため、米の味から粒の大きさ、舌ざわりががらりと変わることがある。とくに最近はこの研究所で作出した新しい品種がよく使われる。このときは品種名が食堂に掲示され宣伝に一役買うというわけである。

さてLaboratoryから少し離れたService Buildingには、自動車整備部、電気部、木工部、塗装部、修理部、消費物資の支給部などがあり70haの実験農場やその他のあらゆる

施設の管理を行なっている。そしてわたくしの属している農業工学部門のみがこのService Buildingの中に研究室と作工場を持っている。研究室の人員は、室長のMr. Loyd Johnson(米)、フィリピンの農業経営についての研究を行なっている特別スタッフのDr. Stanley Johnson(米)、それに東京大学に留学してマスターを取った助手のMr. Emilio Casem(フィリピン)、フィリピン人の研究生3人、秘書が2人、タイピストおよび製図工がそれぞれ1人といった構成である。また作工場には機械工3人、溶接工2人、板金工1人、それにトラクターのオペレーターが1人おり、ちょっとした町工場のような感じである。

今までにこの研究室でやってきた研究は、水田用のトラクター車輪の開発、ハンドトラクターの利用試験、用水量に関する研究、耕起の深さと収量に関する研究、植付け間隔の研究、コーン型脱穀機の開発などとひじょうに広範囲にわたっている。しかしどちらかといえば浅く大まかな研究が多かったようである。今年にはフィリピンでまず最初に問題になる耕うん整地用機械の研究に重点がおかれている。こちらではかんがい施設がない水田が大部分で、乾季の末には土壌が乾いてひじょうに硬くなる。このため畜力では耕うんできないので雨期がきて土壌が十分柔らかくなるのを待って耕うんしている。しかし

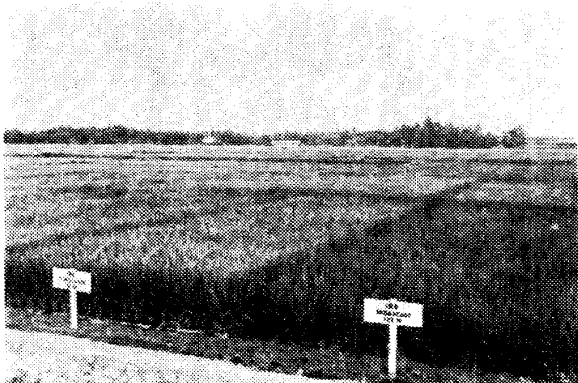


写真3 IRRI の試験圃場



写真4 農業工学科の作工場

お天気まかせでありひじょうに不便な点が多い。また日本製の小型ロータリーティラーを使っても深く耕うんできないし、場合によっては全く耕うん爪がはいらない。現在まずこれらの問題の解決が望まれているのである。これを解決する一つの試みとして、こちらの研究室では大型トラクター（40～60馬力）用、幅4～5mの強力なロータリーティラーの開発を行っており、私もこの研究の一部を担当している。今3番目の試作機を作っているところであるが今後、重量、碎土性能、トラクターとロータリーティラーとのバランスの問題を考えなければならない。この大型ロータリーティラーはフィリピンおよび東南アジアの水田地帯における請負いによる耕うん整地作業の合理化を目的としたものである。

### III

さて IRRI と UPCA のあるこの町ロスバニョスの様子を少し述べておこう。この町はフィリピン最大のルソン島の南部にあり正確な位置は、北緯 14°10′ 東経 121°15′ である。琵琶湖の数倍あるフィリピン最大のラグナ湖の南端に位置する。西にはマッキンレーと呼ばれる1000mくらいの休火山がそびえ、このあたり一帯は温泉地帯でもある。気候は、近くにラグナ湖があるためか、マニラよりはやや涼しい。12～5月が乾季、6月～11月が雨

季となっているが、4、5月を除いては乾季といっても雨は少々降り、厳密にははっきりした区別はつけにくい。この町の人口は約15,000人で多くは農業およびラグナ湖での漁業に従事している。また家畜、家禽を飼う家も多くブタ10～20頭、アヒルまたはニワトリを100～200羽所有しているのが普通である。その他雑貨店や食堂などをやっている者も割合多い。また IRRI や UPCA で働く人の数も多く、学生のための下宿屋をやっている者も多数に上る。IRRI ができてからこの町も相当変わったと聞いている。

この町の娯楽といっても大したものはないが、筆頭は映画であろう。映画館は2軒あるが掘っ立て小屋を少し良くしたような感じの建物である。料金は70円で2本立て4時間というのが普通である。ほとんどがアメリカ映画である。もちろん冷房はないので皆汗をかきながら見ている。ポーリングもひじょうに盛んで、この町にも6レーンのポーリング場が1軒ある。といっても日本にあるような上等なものではない。こちらでは倒れたピンを立てる自動装置がなく、従業員が上半身はだかで汗をふきふき倒れたピンを並べなおし、玉をこちらにころがす。それでも労働力は豊富だから料金のほうは格安で1人1ゲーム35円と日本の1/10である。土曜日などには全レ

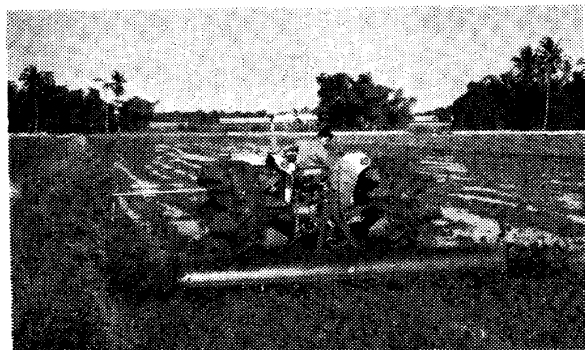


写真5 農業工学研究室で試作した大型ロータリー（幅5m）による代かき作業

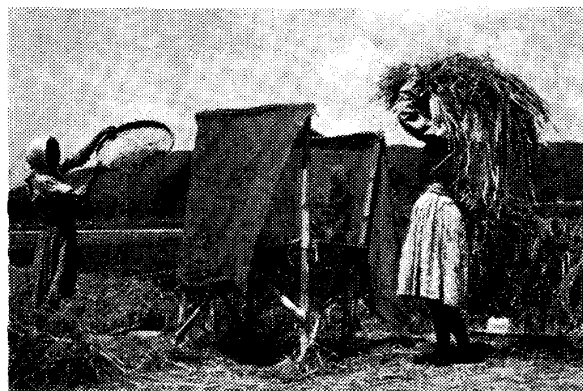


写真6 フィリピン古来の脱穀法の一例（稲を手で洗濯板のような台にたたきつける）

ーンを IRRI の連中で占領することも多い。

こちらでは高級なレストランで食事をしないかぎり、食べ物はいじょうに安い。100円も出せばたっぷり食べられる。また上等のバナナが1本5円、コカコーラは20円である。一方、住のほうはこちらでも相当高くつくようである。この町で2部屋借りると月5,000円～8,000円、大学の構内では同じく2部屋借りて8,000～15,000円であるからフィリピンの一般の人々にとっては大変である。また家を建てるには2部屋のもので土地代ぬきで60～100万円かかると聞いた。ニッパハウスならばもっと安いであろうが、最近ではニッパハウスを建てる者はいないということである。こちらでは手間賃が安いため服の仕立て代などはあまりかからない。ズボン1着の仕立て代が400円くらいである。材料費のほうはやや高いがズボン1着分で1,000円出せば相当いい物を買う。

さてわたくしの部屋の秘書が最近結婚したのであるが、両親のいる郷里に一度帰り女中を1人つれてきて IRRI 近くに家を借りて住むという。新婚で女中を雇うなどということは日本ではとても考えられないから、最初かの女は相当な財産家の娘だろうと想像していた。しかしその後の様子を見ていると、家賃の心配、家具や日用品の準備などこまかいことにまで相当気をくばっている。聞いてみたところお金が足りなくて苦勞しているという。そこで女中を雇える身分でお金がないとはおかしいと思うがと質問したところ、こちらで女中を雇うことは何でもないのである。家賃や家具はいじょうに高いが女中はいじょうに安く雇えるのである。女中1人月3,000円で雇えるということであった。日本の1/10くらいであろうか。もちろん食べさせ衣類は与えなければならぬが、自宅で料理する限り食費は問題にならない。また衣類は安い材料で作れば仕立て代はあまりかからないから女中を

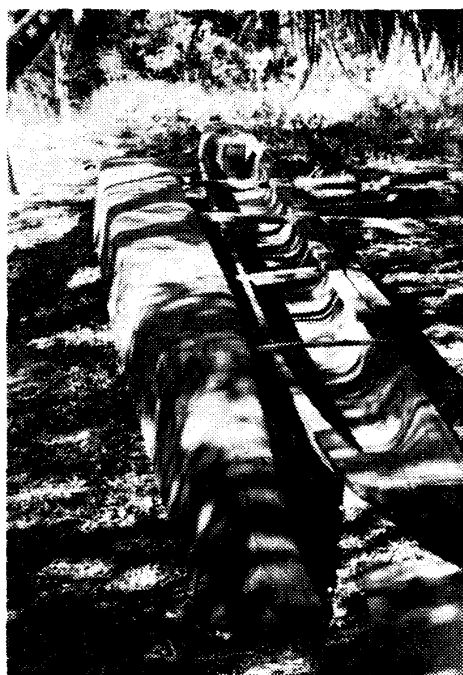


写真7 ラグナ湖で漁業に使うくり抜き船

雇うのはいじょうに簡単なのである。それより家具や日用品の準備がたいへんである。テーブル、椅子、戸棚、たんすなどはこの町にはほとんど売っていない。マニラに行けばショーウィンドーには立派な家具類がかざってあるが、とても一般人に手の出る代物ではない。ところがうまくしたもので、家具類を作る素人大工がたくさんいるのである。技術はやや悪いが安くて十分に実用的なものを作っている。フィリピン人の家に招かれるとたいいてい家にあまり上等ではないが割合たくさん家具がそろっている。これらはみな素人大工に注文して作ってもらうのである。場合によってはテレビの外側の箱まで作る。中は別の素人電気屋が材料を集めてセットするのである。これら種々の技術を持っている者はフィリピンには相当多いようである。現在フィリピンの総人口は3,400万人、労働人口が1,200万人といわれ、その内失業と半失業を合わせて200万人に達するといわれている。しかし、失業者の中には正式の職はなくても各種の技

術を持ち、それで十分に生計を立てている者も多いのではないかと思う。

フィリピンに来て驚いたことは、銀行は言うにおよばず商社その他のあらゆるオフィスに鉄砲を持った守衛がいることである。今は慣れたが最初は無気味で近づきにくかった。マニラのある日本料理店では鉄砲を持ったドアマンが立っている。聞くところによるとギャングがまだ少しいるそうであるが、最近はまだ問題にするほどのことはなさそうである。こちらでは警察力が日本ほど強くないため自然と自衛するという傾向が出てくるのであろう。しかし IRRI でも相当用心はしているようである。というのは IRRI の専用郵便車は時々マニラの銀行から研究所へ現金を運ぶことがあるが、その時はドライバーに護衛が1人つき、両者ともピストルを持って行く。そしてポケットにも少々予備の弾丸を入れて行く。こんな時は西部劇を地でゆく感じもする。

こちらの主な交通機関は長距離は前にも述べた大型バスが多く利用されているが、近距離にはジプニーと呼ばれる乗物が利用される。これはジープの後部を改造して10名余りの乗客が乗れるようにしたものである。大戦後車のない時に古いジープを改造して作ったのが始まりと聞かすが、馬力があり、かつ悪路にも強いのでひじょうに普及している。今ではほとんど新しいジプニーが製造されている。普通は一定のルートを走っているが、停留場は

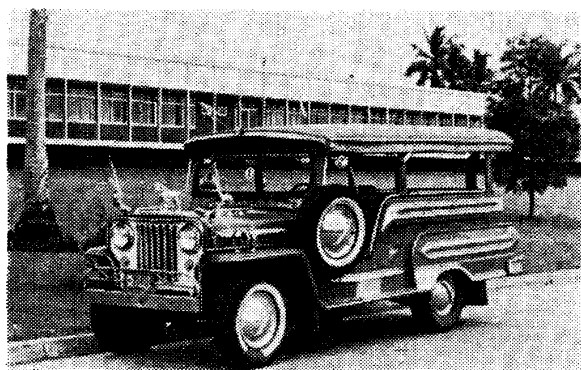


写真8 ジプニー

なくどこからでも乗れ、好きなところで降りられる。料金は10セントボス(約9円)である。数もひじょうに多く相乗りタクシーといった感じの、はなはだ便利な乗物である。さてもう一つカレッサと呼ばれるスペイン系の優雅な乗物がある。これは小馬が引く2輪馬車で最大6人まで乗れる。スピードはあまり出ないが、夕涼みや見物には格好な乗物である。これはまたジプニーでは入りにくい狭い所でもよく使われている。しかしこの乗物も最近ではだんだん数が減りトライシクル(Tricycle)と呼ぶ2人乗りのエンジン付き小型3輪自転車にとって代わられつつある。このエンジンはほとんど全部日本製だと聞いた。

#### IV

さてフィリピン人の日本に対する関心は極めて高い。これは第一にひじょうに広く出まわっている日本商品のためであろう。ソニー、ヒタチ、ナショナルなどは言うに及ばず、トヨタ、ニッサン、クボタ、ホンダ、三菱、あるいはアジノモト、カミノモト、タンチョーといった広告はあらゆるところで目につく。電気製品は相当出まわっているであろうと予想していたが、その他にもあらゆる日本の製品が入ってきている。とくにマニラのタクシーは日本のコロナとブルーバードがひじょうに多く、その進出ぶりは目を見張らせるものがある。以前はドイツのフォルクスワーゲン

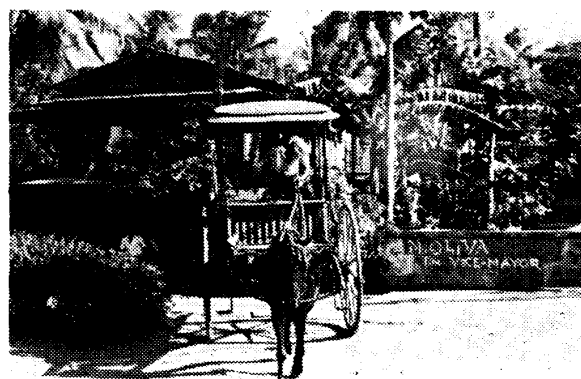


写真9 カレッサと呼ばれるスペイン系の小型馬車

が相当あったと聞くが今は影がうすい。そこでなぜフォルクスワーゲンよりコロナやブルーバードがいいのかとフィリピン人に質問してみた。かれらがあげた理由は第一にデザインが良いという点であった。これは車の性能が互角になった今日、勝負はデザインの良し悪しにかかっているのであろう。質実なスタイルで欧米では確固たる地位を築いたフォルクスワーゲンも、こちらではもはや好みに合わなくなっているようである。しかし日本製のタクシーだからといって安心して乗ると料金をぼられることがある。とくに初めてフィリピンに来た日本人があぶない。料金メーターの読みはペソであるが、相手がフィリピンの事情に通じていないと見るとこれをドルで要求する。為替率は約3.9であるから3.9倍の料金を払わされることになる。日本人がよくねられるのは対日感情とはあまり関係はない。要は日本人は英語がうまく話せない場合が多いのと、割合金を持っているということになっているからである。

概して日本人の評判は良い。最近では生け花、空手、柔道なども流行のきざしを見せている。UPCA では時おり生け花の講習会が開かれ、おやっと思ふことがある。マニラには無数の空手、柔道の道場ができています。しかしこれらの道場にはいいかげんなものも多いと聞いた。フィリピンの大学の中には日本語コースもだいふんできているようである。日本史を習ったという者も多い。頼朝、家康というような言葉をフィリピン人から聞かされて驚いたことがある。フィリピン側では日本から多くのものを学ぼうとする姿勢は相当強いものがある。その点日本人のフィリピンに対する知識の乏しさ、関心の薄さということは問題であろう。しかし日本が誤解されている面も多いことは確かである。キモノ、ゲイシャ、ハラキリとくるとあまり調子がよくない。どういふ訳か日本女性はみな着物を着ており、



写真10 各国から来ている trainee (短期研修生)の田植え実習

かつ芸者であって、ハラキリが今でも行なわれていると思っている者もいるから困る。ハラキリをやってみたくれと頼まれたことがある。また日本は男尊女卑の国であり、女性は男性と行動を共にすることができない、食事にも同席できないというふうを考えているフィリピン女性が一部あるのには驚いた。これらは日本とフィリピンとの交流が不足していることが原因であろう。しかしフィリピンにやってくる日本人が増えたこと、また農業技術などのトレーニングで日本に行くフィリピン人が増えたことと相まって、日本に対する理解は急速に深まっている。戦争の傷あとが完全に癒えたと考えるのは間違いであろうが、対日感情についてもひじょうに良くなっていることは事実である。

現在 IRRI には research fellow, research scholar, trainee など合わせて80名がいる。ほとんど世界のあらゆる国々から来ており日本、韓国、台湾、フィリピン、タイ、インドネシア、インド、パキスタン、セイロン、ネパール、カイロ、ナイジェリア、オランダ、ドイツ、アメリカと実に国際色豊かである。時々開かれる歓迎あるいは送別パーティーには各国の民族衣装が見られる。また各国の民謡や踊りが楽しめるが、これらは IRRI ならではのことであろう。ここに来ている者はみな行儀がよい。とくにカイロから来ている

research fellow, ナイジェリアの research scholar などは紳士然としておりたいへん感じがよい。ここでユニークな位置を占めるのはインド、パキスタン人であろう。かれらはプライドが高く、ややつき合いにくいというのが相場である。何事についても知らないと言ふことをひじょうな恥と考えているようである。だいたい日本語を二、三語知っていれば俺は日本語が話せるとくる。それに実に聞き取りにくい英語でまくしたて、こちらがお前の発音は悪いとでも言おうものならかんかんになって怒る。しかし根はたいへんいい人間であり変な後くされはない。かれらは他国との習慣や文化の相違もあり、一つの独自のグループを形成している。その他の国々の間には大きな習慣の相違もなく自由につき合える。しかしアジア人グループと欧米人グループに分かれる傾向がある。東南アジア各国の人達と欧米人とのつき合いというのはお互いに少しやりにくそうである。これは言葉の点で何ら障害のないフィリピン人とアメリカ人との間でもいえることである。皮膚の色や文化の相違と共にやはり以前植民地であったということが両者の心の底にあるように思われる。その点日本、韓国、台湾、タイなどは英語のニガ手なグループであるが、欧米諸国の植民地になったことがないため、どこの国とも自由につき合っている。とくに日本人は東南アジアの国々の間では評判がよい。あるオランダ人は日本も欧米と同じように東南アジアで植民地政策を行なったのに、こちらでは日本に対する批判を聞いたことがないのはわからないと、わたくしに語ったことがある。この理由は日本人であるわたくしにもわからない。しかし日本が将来はたすことができる役割はわかるような気がするのである。

## ビルマの現状

大野 徹

### 10年ぶりのラングーン

1967年5月27日。ちょうど正午に羽田を飛び立った BOAC 機は、午後4時に香港に到着、約1時間休憩した後南支那海を経て戦乱のベトナム上空に進入、ゆっくりと蛇行するメコンの大河を眼下に見おろしつつ、やがて緑豊かなチャオプラヤー平野を横断、次第にビルマへと接近した。タイからビルマへかけての上空には、インド洋から運ばれてくる雨雲が幾重にもたれ込めていて、このあたり一帯に既に雨期が訪れていることをはっきりと示している。機窓から眺めた下ビルマ（南部ビルマ）の風景は、見渡す限り一面の水田で、



写真1 南部ビルマの水田